

空移動仮説と主語の獲得

Vacuous Movement Hypothesis and the Acquisition of the Subject

古川武史・福田 稔

本稿では、線形語順に影響を与えない移動は生じないという空移動仮説について、言語獲得の側面から問題点を指摘する。空移動仮説のもとでは主語 *wh* は顕在的に移動していないと予測する。言語獲得の過程で主語が顕在的に移動している資料に子どもが接する機会がないためである、というのがその論拠の1つである。事実、英語における *wh* 疑問文の獲得についての研究からは、主語 *wh* の統語位置について決定的な証拠を得ることが難しい。そこで、日英語の主語の格表示の獲得過程に着目して空移動仮説を検証する。主語が T P 指定部へ移動していると仮定する時に初めて獲得に関する事実が説明できるので、言語獲得から空移動仮説は支持することは困難であると主張する。

キーワード：空移動仮説、格表示、言語獲得、主語、主格、属格、移動、*wh* 疑問文

目次

- I はじめに
- II 英語における *wh* 疑問文の獲得と統語位置
- III 英語における主語の格表示の獲得
- IV 日本語における主語の格表示の獲得
- V おわりに

I はじめに¹

線形語順に影響を与えない移動は生じないという空移動仮説について、古川・福田 (2009) は経験的な問題があることを指摘した。本稿では空移動仮説の言語獲得における問題点を指摘する。

語順に着目すれば主語は基底の位置と表層の位置は同じであるので、空移動仮説のもとでは主語 *wh* は顕在的に移動していないと予測する。さらに、Chomsky (1986) は、言語獲得の過程で主語が顕在的に移動している資料に子どもが接する機会がないために空移動仮説は支持されるとしている。

そこで、第2節では、英語における *wh* 疑問文の獲得に関する研究を概観し、それらの研究からは、主語 *wh* の統語位置について決定的な証拠を得ることが難しいということを指摘する。そこで、第3節と第4節では、日英語の主語の格表示の獲得過程に着目して空移動仮説を検証する。具体的には、子どもが誤って用いる主語の格表示の事例と獲得の過程を説明した研究を概観し、説明のためには、主語が T P 指定部へ移動していると仮定する必要があることを指摘する。その帰結として、言語獲得から空移動仮説を支持することは困難であると主張する。第5節で議論をまとめる。

II 英語における *wh* 疑問文の獲得と統語位置

1 空移動仮説

英語の主語は目的語と異なる統語的特質、つまり、主語と目的語の非対称性 (subject-object asymmetry) を示す。英語に見られる主語と目的語との非対称性には、*that* 痕跡効果 (*that*-trace effect) の有無 (1)、寄生空所 (parasitic gap) 構文の対比 (2)、島の効果 (island-effect) の有無 (3) などが挙げられる。

- (1) a. Who do you hope (that) Barbara Walters will interview?
 b. Who do you hope (*that) will interview the President?
- (2) a. What did you file [before reading *e*]?
 b. *Who met you [before you recognized *e*]?
- (3) a. ?What do you wonder who saw?
 b. *When did you wonder who Bill married?

(1) は *that* 痕跡効果の例であるが、目的語が移動する場合、補文化詞 *that* の有無で *wh* 疑問文の文法性に差は生じないが、主語の場合は補文化詞 *that* が省略されないと文法性に差が生じる。(2) は寄生空所に見られる主語と目的語の非対称性の例である。目的語 *wh* は寄生空所 *e* を認可するが、主語 *wh* の移動は寄生空所を認可しない。(3) は島の効果における主語と目的語の非対称性の例である。主語の疑問詞が埋め込み文である *wh* 島に留まり、この *wh* 島から主語以外の疑問詞を抜き出すと、幾分文法性は下がるものの容認可能である (3 a)。一方、目的語の疑問詞が *wh* 島に留まり、この *wh* 島から別の疑問詞を抜き出すと非文になることが観察されている (3 b)。

ここで重要になるのが、このような疑問文における主語と目的語の非対称性についてどのような立場で説明するのかという点である。具体的には、主語 *wh* の疑問文の場合、主語 *wh* が顕在的 (overt) な移動を起こしているか否かで、対立する立場がある。例えば (4) にあるように、主語 *wh* は、他の疑問詞同様に C P の指定部へ顕在的に移動するという立場である。

- (4) [CP Who [TP *t* will meet the President]]?

この立場自体から自動的に主語と目的語の非対称性は説明できないので、別の方策で主語と目的語の非対称性を説明する必要性が生じる。

それに対して (5) に示したように、主語 *wh* は T P 内に留まり、C P 指定部には顕在的に移動していないという立場 (Chomsky (1986), George (1980), Radford (1990)) がある。これは線形語順に影響を与えない場合移動は生じないという立場であり、空移動仮説 (Vacuous Movement Hypothesis) と呼ばれる²。

- (5) [CP [TP Who will meet the President]]?

この立場では、主語 *wh* が、目的語 *wh* と異なり、T P 内に留まっているために、C P の指定部が空となる。主語以外の *wh* 要素が、この空の C P 指定部を利用して移動できることになる。(3 a) は次のような派生を取る。

- (6) ?What do you wonder [CP *t'* [TP who saw *t*]]?

一方、目的語 *wh* は、顕在的に C P 指定部に移動しているので、目的語 *wh* が移動した C P が *wh* 島となり、他の *wh* 要素が *wh* 島である C P を飛び越えて移動すると非文となる。

- (7) *When did you wonder [CP who [TP Bill married *t*]]?

このように (3) のような *wh* 島からの *wh* 要素の抜き出しの文法性の差が自動的に説明できる。

寄生空所 (2) の例でも、主語は顕在的に移動していないので、認可される時点で寄生する主語 *wh* の痕跡がないために容認性が下がると説明することができる。

- (8) a. [CP What did [TP you file *t* [before reading *e*]]]?
 b. *[TP Who met you [before you recognized *e*]]?

2 言語獲得における主語と目的語の非対称性

言語獲得の観点から *wh* 要素の主語と目的語の非対称性の問題を考えてみよう。

wh 要素は主語と目的語に関わらず常に移動するという仮説のもとでは、主語 *wh* も目的語 *wh* も一様に C P へ移動することになるので、パラメタ (parameter) を組み込んだ言語理論においては、英語の言語獲得の過程で主語 *wh* の振る舞いを例外的に扱わなくて済み、概念上好ましいことにな

る³。また、主語の *wh* 疑問文は顕在的に移動している目的語の *wh* 疑問文に触れることで、子どもは英語の *wh* パラメタを「顕在的に移動する」という値に設定すると考えると、目的語の *wh* 疑問文の方が先に獲得されるか、目的語の *wh* 疑問文とほぼ同じ時期に獲得されると予測される。

一方、空移動仮説のもとでは主語 *wh* は顕在的に移動しないため、統語操作として単純で獲得しやすいということになる。そのため、主語 *wh* 疑問文は、それ以外の *wh* 疑問文よりも先に獲得されると予測する。しかしながら、*wh* 要素が顕在的に移動するか否かの言語を決めるパラメタは、主語のみ例外的に常に「移動しない」という値に設定しなければならず、前者の立場より複雑な説明が必要になってしまう。

3 主語と目的語の獲得

まず Stromswold (1995) の考察を概観してみよう。Stromswold (1995) は、主語と目的語の非対称性について言語獲得の視点から12名の英語母語話者の子どもの CHILDES のデータを調査している。それによると目的語 *wh* 疑問文は、主語 *wh* 疑問文よりも早く獲得されるか、あるいは同時に獲得されるとしている。つまり、主語 *wh* が移動していないという立場ではなく、主語 *wh* も C P へ移動しているという立場を支持する観察を提示している。

Stromswold (1995) の調査結果をまとめておこう。まず、疑問詞自体の獲得の順番は、*what*, *who*, *which* の順となる。最初の発話月例の幅を主語と目的語の別に示し、最初の発話の平均月例、続いて、主語、目的語のどちらの疑問文を最初に発したか人数の比較を行った。

(9) 疑問詞全体の比較

主語 1才8.5ヶ月～3才8.2ヶ月、平均2才5.2ヶ月
目的語 1才9.8ヶ月～2才8.8ヶ月、平均2才3.4ヶ月
5名が主語疑問文よりも目的語疑問文を先に発した。
3名が目的語疑問文よりも主語疑問文を先に発した。
4名が主語疑問文と目的語疑問文を同時期に発した。

(10) *who* の比較

主語 1才8.5ヶ月～3才10.5ヶ月、平均2才6.3ヶ月
目的語 2才0.5ヶ月～3才1.2ヶ月、平均2才5.4ヶ月
6名が主語疑問文よりも目的語疑問文を先に発した。
4名が目的語疑問文よりも主語疑問文を先に発した。
1名が主語疑問文と目的語疑問文とを同時期に発した。(who 疑問文自体を発する記録がない子どもが1名いた。そのため除外している。)

(11) *what* の比較

主語 1才11.3ヶ月～3才9.0ヶ月、平均2才7.3ヶ月

目的語 1才9.8ヶ月～2才9.2ヶ月、平均2才3.6ヶ月
8名が主語疑問文よりも目的語疑問文を先に発した。
4名が主語疑問文と目的語疑問文を同時期に発した。
主語疑問文の方を先に発した子どもはいなかった。

(12) *which* の比較

主語 2才9.7ヶ月～4才4.0ヶ月、平均3才6.9ヶ月 (6名のみ発話。)
目的語 2才3.5ヶ月～3才10.2ヶ月、平均2才11.9ヶ月 (9名のみ発話。)
どちらも獲得した6名は、主語疑問文よりも大幅に早く目的語疑問文を発した。
5名が主語疑問文より早く目的語疑問文を発した。
1名が主語目的語の疑問文を同じ月例で発した。

調査対象とした子どものコーパスをもとに、疑問文の種別に先に獲得した人数を表にすると次のようになる。

(13)

	主語を先に獲得	目的語を先に獲得	同時期に獲得
Wh 疑問文全体	3	5	4
Who 疑問文	4	6	1
What 疑問文	0	8	4
Which 疑問文	0	5	1

who の場合を除いて、最初の発話時期の幅と平均月例は主語よりも目的語の方が早く獲得され、子ども別に見ると主語疑問文よりも目的語疑問文を先に獲得あるいは同時期に獲得していると言える。

who 疑問文について、Stromswold (1995) は *who* 疑問文の中で主語を産出する割合、つまり *who* を使う疑問文の主語疑問文の頻度は、圧倒的に多く、子どもによって50%から79%で、平均すると、66.3%の割合であると報告している。そのため主語を先に獲得したとも言えるが、使用頻度には格段の差があるものの、6名の子どもが目的語の疑問文を先に産出している。

さらに、Guasti (2000) によると英語話者の1歳半から5歳1ヶ月の子ども4名の発話の2809の *wh* 疑問文のうち、41の疑問文(1%)が元位置に留まった形での発話であったとしている。しかし、これらの疑問文を発した文脈を調査すると、41の疑問文のうちほとんど、あるいはすべてがエコー疑問文 (echo question) であるとしている。エコー疑問文は、英語をターゲット言語としている子どもにとって言語獲得上の相反する証拠 (conflicting evidence) になっている可能性はある。しかし、彼女は移動が関与している *wh* 疑問文の方が必ずしも先に獲得されるという訳ではないと結論づけている。つまり、通常の疑問文の場合は *wh* 移動を行い、また、エコー疑問文の場合は、*wh*

移動を避けるという使い分けを子どもは適切に行っているという主張をしている。

これに関連して、3歳児の英語話者に疑問文とエコー疑問文のテストをすると、答えに明らかな違いがあるという報告 (Takahashi (1991), Maxfield (1991)) がある。The children had fruits for dessert. という話を聞かせて、その後に子どもたちが様々なフルーツを食べている絵を見せながら、通常疑問文とエコー疑問文で質問をすると被験者の子どもたちはそれぞれの質問に対して適切な応答を行う。

- (14) "What did the children eat?"
"Strawberry, and a banana, and a cherry."
(15) "The children eat what?"
"Fruits."

つまり、Stromswold (1995) が調査した主語 *wh* の疑問文は、エコー疑問文の可能性があるのではないかと思われ、文脈等を精査する必要があると思われる。

最後に、Radford (1990) の主張を見ておこう。Radford (1990) は、文法の初期状態には T や C などの機能範疇を欠き、言語獲得が進むと機能範疇を獲得していくという立場を取る。この立場が正しいとすると機能範疇を獲得する前は、主語や目的語は V P 内にあり、時制を欠く節である小節 (Small Clause) 構造内にあるとしている。そのため、言語獲得の初期のころは、疑問文では主語 *wh* は移動せず、目的語の *wh* 要素は主語同様に V P 内の元位置に留まることになる。その後 C や T の機能範疇が獲得され、目的語 *wh* が主語を超えて文頭へと移動するようになる。子どもは主語疑問文を目的語疑問文よりも先に発すると予測する。したがって、結果 Stromswold (1995) が調査した結果とは矛盾する順序を予測することになる。

さらに獲得が進み、*wh* 要素が文頭へ移動するようになる。そうすると、*wh* 要素はどこに移動するかというと、Radford (1990) は言語獲得の初期の段階では機能範疇がないとするため、*wh* 句は動詞的な小節 ((16) の V P) に節付加詞 (clausal adjunct) として V P に付加していると主張する。

- (16) [VP What [VP kitty doing e]]? (Radford (1990 : 134))

これは子どもの発話で観察される "Balloon throw. (風船、投げたよ)" のように目的語のトピックに対してコメントを表した構造に類するものであり、表層的には大人の目的語の *wh* 疑問文に類似しているとしている。また Chomsky (1986) の障壁理論などでも *wh* 移動の途中に V P 付加することが仮定されているので理論的にも問題ないと Radford (1990) は主張している。また Radford (1990) は、V P 付加の経験的な証拠として、フランス語やポーランド語の疑問文の例を挙げている⁴。

しかしながら、*wh* 要素が小節 (V P) へ付加することは大人の文法では許されない。この点は、Radford (1990) 自身も認めている。そのため、大人と子どもの文法の違いも説明する必要がある。あるいは、少なくとも子どもの文法ではこのような制約が成り立たないと規定せざるを得ない。また、移動した *wh* 要素が小節に付加しているとする、この *wh* 要素は移動によって派生されたのかあるいは基底生成されたものなのかは、議論の余地はある。

以上のように、Radford (1990) の主張にはさまざまな問題点がある。また、Stromswold (1995) の言語獲得の順序に関しても調査上の問題があるので、主語の *wh* 要素が移動しているかどうか決定的な証拠があるとは言えない。言い換えるならば、線形語順に影響を与えない移動は生じないという空移動仮説は *wh* 要素の言語獲得の側面から支持できるかどうか、という命題に対して結論を引き出すことは難しい状況にある。

そこで、次章では *wh* 疑問文ではなく、主語の格表示の獲得に着目して、線形語順に影響を与えない主語の移動は生じるか否かという命題について検討する。

III 英語における主語の格表示の獲得

英語を母語として獲得している、およそ2歳の子どもが、主語として使用される代名詞に主格代名詞でなく、対格代名詞や属格代名詞を誤って用いてしまう事例が報告されている (Schutze and Wexler (1996 : 670))。英語では独立節は必ず定形節になるが (有村・その他 (2009 : 7))、これらの事例では動詞が非定形であることにも注意されたい。

- (17) Him fall down. (Nina, 2;3.14, File 17)
(18) Her have a big mouth. (Nina, 2;2.6, File 13)

Schutze and Wexler (1996) は、獲得段階におけるこの格表示の間違いを次の仮説を基に説明している。第一に、2歳前後の子どもは既に大人の文法と同じような統語構造を仮定していること。第二に、時制 (Tense) の素性の値が未指定であること、である。

具体的には、Schutze and Wexler (1996) は「一致と時制の脱落モデル」(Agreement and Tense Omission Model) を提案している。このモデルによると、節の統語構造での INFL (ミニマリスト・プログラムで仮定されている T に対応) が、T (ense) と Agr (eement) という独立した2つの素性を持っており、それぞれの素性がプラスかマイナスの一方の値を持つ。定形節 (finite clause) か非定形節 (non-finite clause) かという節の種類は、[+tns] か [-tns] かという素性の値と対応することになる。また、T が主語に主格を与えるのは [+agr] の場合で、[-agr] の値となるときは主格を与えずに、主語は主格以外の格が与えられることになる。

上記のモデルがどのように予測するか具体例を見てみよう (Schutze and Wexler (1996 :

678-679)。

(19)

INFL	description	examples
[+tns, +agr]	NOM assigned	<i>he cries</i>
[+tns, -agr]	NOM unassignable, default ACC surfaces	<i>him cried</i>
[-tns, +agr]	NOM assigned, agreement invisible	<i>he cry</i>
[-tns, -agr]	NOM unassignable, GEN assigned	<i>my cry, my crying</i>

まず、[+tns]の定形節の場合は、[agr]の値に応じて2つの形式として具現化する。1つは[+tns, +agr]で、これは大人の文法であるが、主語代名詞は主格を取り、正しく派生される (*he cries*)。もう1つは [+tns, -agr] である。[+tns] なので定形節になるが、[-agr] となるので、主語に主格は与えられず、default Caseとして対格が付与される (*him cried*)。

一方、[-tns] の非定形節の場合も、[agr] の値に応じて2つの形式として具現化する。1つは [-tns, +agr] で、[-tns] なので動詞は非定形であるが、[+agr] があるために主語代名詞は主格を取る (*he cry*)。これに対して、[-tns, -agr] の場合も [-tns] なので非定形節になるが、[-agr] があるので、主語に主格は与えられずに、この場合は属格が付与される (*my cry, my crying*)。

ここで注意すべきことは、まず、Schutze and Wexler (1996) の「一致と時制の脱落モデル」が成立するためには、子どもは極めて早い段階 (2歳になる頃には) で大人の文法と同じように、主語はT P指定部にあると見なしている、ということである。そして、その位置は時制素性と一致素性の照合をする位置なので、主題役割は別の投射で与えられることになる。一般に、その位置はvP指定部かV P補部と仮定されている。これらの帰結として、主語は下位のvP内部の位置からT P指定部へ移動していると考えられることができる。

この帰結は、前章で概観した、子どもの統語構造には機能範疇は存在せずに、主語 *wh* はV Pに留まっているというRadford (1990) の主張にとって問題となる。Radford (1990) の分析では、子どもの統語構造にはT (あるいはINFL) などの機能範疇がないので、(19) に示した4つの形式を捉えることができないからである。

もし、主語 *wh* はV Pに留まっておらず、それより高い位置に移動しているのであれば、言語獲得の面から空移動仮説を支持できるというChomsky (1986) の主張も弱まることになる。

IV 日本語における主語の格表示の獲得

日本語においても、母語を獲得しているおよそ2歳の子どもが、主語名詞に主格の格助詞「が」でなく、与格の格助詞「に」や属格の格助詞「の」を誤って用いてしまう事例が報告されている

(Murasugi (2010), Sawada, Murasugi, and Fuji (2010), 鈴木 (2007))⁵。

主語+「に」の事例

(20) A-tyan-***ni** tabe-tya-u (A, 2;7) (Adult form: A-tyan-**ga**)(21) Kotesasehime-***ni** dakkosi-te (Moko, 2;7) (Adult form: Kotesasehime-**ga**)

主語+「の」の事例

(22) Jun-***no** kowat-ta (=kawasita) zoo (Jun, 2;2) (Adult form: Jun-**ga**)(23) Moko-***no** warat-tyat-ta (Moko, 2;3) (Adult form: Moko-**ga**)

鈴木 (2007: 45) は主語の格表示を獲得の順に応じて、①ゼロ格表示、②「の」による表示、③「の」・「が」による表示 (「が」の出現期)、④「が」による表示の4期に分けている ((24) ~ (31) の事例の太字と「大人の文形式」は著者による)。

①ゼロ格表示期

(24) ままいない (1;10) (大人の文形式: ママ**が**いない)(25) あめふってる (1;11) (大人の文形式: 雨**が**降ってる)

②「の」による表示期

(26) みに**の**うたってるよ (2;01) (大人の文形式: ミニ**ーが**歌ってるよ)(27) Aちゃん**の**つくったの (2;03) (大人の文形式: Aちゃん**が**作ったの)

③「の」・「が」による表示期 (「が」の出現期)

(28) ぼうし**が**とんだ (2;02) (大人の文形式: 帽子**が**飛んだ)(29) あめ**が**ふってしまった (2;03) (大人の文形式: 雨**が**降ってしまった)

④「が」による表示期

(30) だれ**が**ちがいくの? (2;11) (大人の文形式: 誰**が**行くの?)(31) おはなもってる**が**こっちいくよ (3;04) (大人の文形式: お花持ってる人**が**こっち来るよ)

鈴木 (2007: 48) によると、「の」が使用されて1ヶ月遅れで「が」が用いられ始めている。見方によっては、実質的には2歳頃の子どもは主格の格助詞「が」も同時に使っていると言えるので、Sawada, Murasugi, and Fuji (2010) は、主語が「の」で表示される「間違った格助詞の使い方」は、子どもが格付与のシステムを知らないことによって生じているのではない、と結論付

けている⁶。

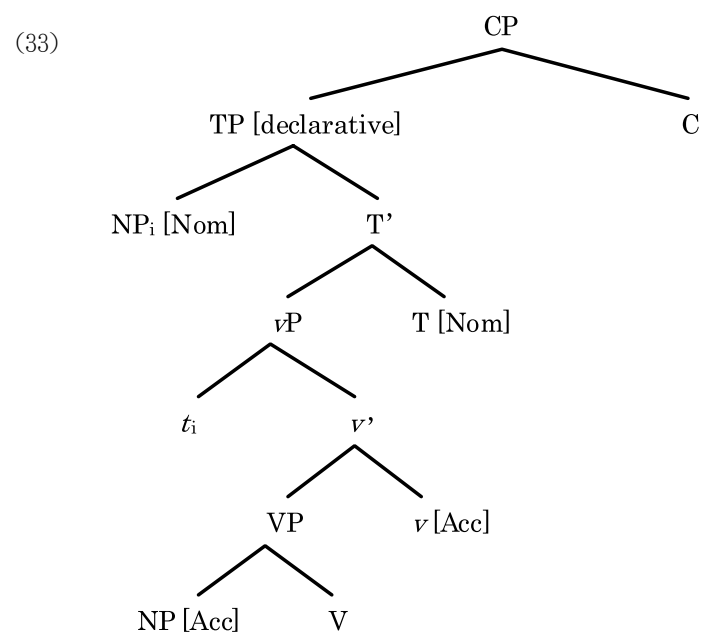
本稿では主語が属格「の」によって表示される事例に着目していくことにする⁷。この時期においても大人の文法と同じ制約に従うことも注目に値すべき事実である。例えば、(32) のように関係詞節に対格表示された名詞があるときは「が・の」交代 (Ga-No Conversion) は生じないという「他動性制約」(Transitivity Restriction) がある。

(32) [Taroo-ga/-*no hon-o kat-ta] mise

例えば、(27) のように子どもの発話もこれに従っており、Sawada, Murasugi, and Fuji (2010) は、違反している事例は極めて少なく、87.5%の事例がこの制約に従っていると報告している。

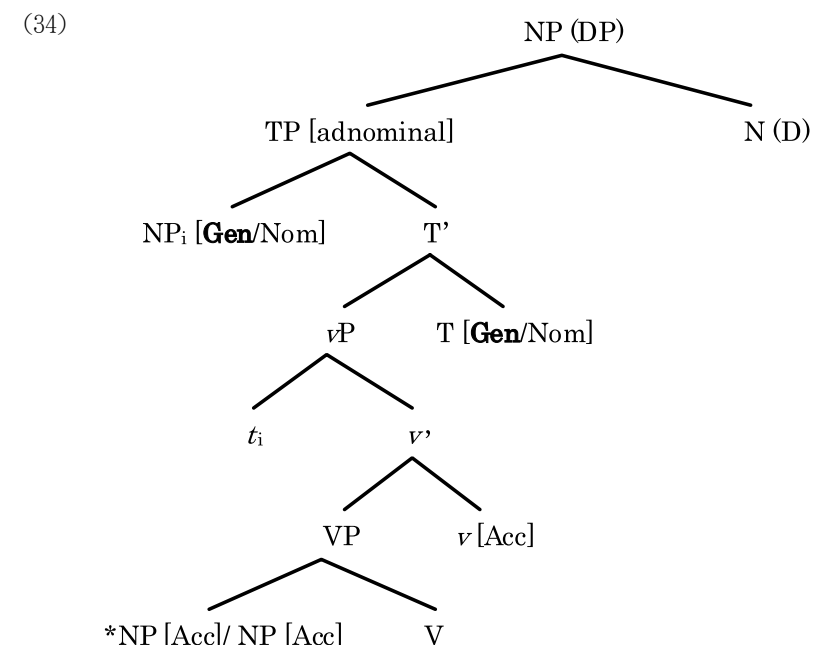
また、主語が誤って属格「の」によって表示される節の述語も、「が・の」交代が生じるときの述語と同じく、静的(stative)な意味を表す述語(非対格動詞、形容詞、相表現など)である(Sawada, Murasugi, and Fuji (2010), 鈴木(2007))。

鈴木(2007)が「拡張」という概念で「の」による表示から「が」による表示への変遷を説明しているのに対して、Sawada, Murasugi, and Fuji (2010) は統語構造に着目して説明している。具体的には、Sawada, Murasugi, and Fuji (2010) は、主語が誤って属格「の」によって表示される事例を説明するためにSaito(2004)の分析を採用している。そこでまず、一般の主格表示、つまり、Tが主格を照合する構造を見てみよう。この場合のTはDeclarative Tと呼ばれ、その最大投射TP [declarative] はCの補部となる。



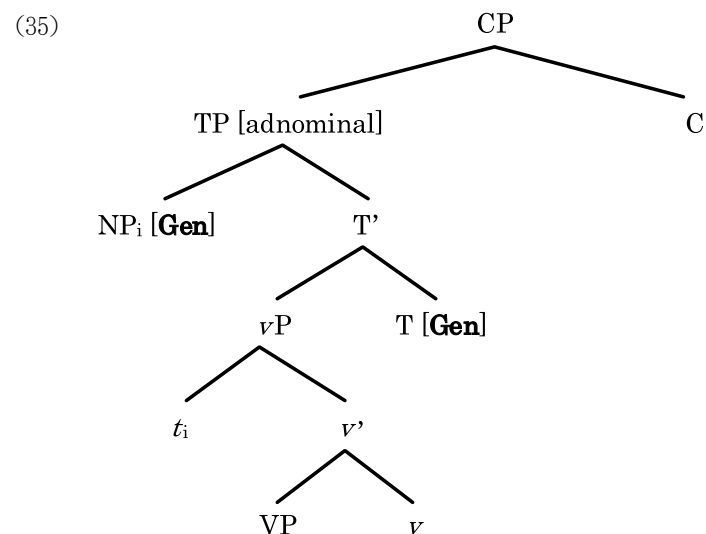
主語はvP指定部からTP [declarative]の指定部へ移動して、Tによって主格が照合される。したがって、主語が主格「が」で表示されるのはTPがCの補部になる場合である。

これに対して、主語が属格「の」によって表示されるのはTPがN(D)の補部になる場合である。



この場合のTはAdnominal Tと呼ばれるが、この場合も主語はvP指定部からTP [adnominal]の指定部へ移動する。Adnominal Tは主格か属格のいずれかを照合できるので、「が・の」交代が生じるのである。ただし、属格が照合される場合は、他動性制約のために対格「を」で表示されたNPは生じることができない。一方、主格が照合される場合は他動性制約は適用しないので、対格「を」で表示されたNPが生起できる。

上記の分析をもとにして、Sawada, Murasugi, and Fuji (2010) は、子どもが主語を誤って属格で表示する仕組みを以下のように説明している。まず2歳前後では、子どもは既にAdnominal Tが属格を照合することを知っているが、その最大投射のTP [adnominal]がN(D)の補部になるという条件を獲得しておらず、デフォルトの根節(root clause)はCPであると判断している。したがって、以下のような独立節を仮定し、主語の属格表示を誤って許してしまうのである。



上記の議論から以下の帰結が得られる。まず、日本語の獲得においても主語が誤った格で表示される事例があるが、それは極めて早い段階で子どもはAdnominal TがTP指定部の主語の格を照合することを知っているためである。したがって、線形語順だけでは移動が生じていないように見える事例でも、わずか2歳という時期に発話された構文で主語の移動が生じているのである。つまり、日本語の事実からも、言語獲得の面から空移動仮説は支持できるとしたChomsky (1986) の主張は弱まることになる。

V おわりに

Chomsky (1986) は、*wh*疑問文の移動の事例を説明するために空移動仮説を前提としたが、空移動仮説には経験的な問題があることを古川・福田 (2009) で指摘した。本稿では空移動仮説には言語獲得においても問題点があると論じた。英語における *wh*疑問文の獲得に関する事実から空移動仮説の妥当性に関する結論を引き出すことは難しいものの、日英語の主語の格表示の獲得過程の説明をするためには空移動仮説は受け入れられないからである。

経験上の問題と言語獲得の側面における事実を勘案して、空移動仮説には妥当性がないというのが我々の結論である。

註

¹ 本研究は平成22年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 課題番号: 22520506 研究課題名 左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究 (代表者 福田稔) の援助を受けている。

² 異なる定義があるので注意が必要である。例えば、Stromswold (1995) は主語が顕在的に移動しているとする仮説を空移動仮説と呼んでいる。

³ ここでのパラメタは、*wh*要素が顕在的に移動する言語か否かを定める媒介変数のことを指す。

⁴ 詳しい議論はRadford (1990) を参照のこと。

⁵ 英語論文と日本語論文から引用したため、表記が英語と日本語が混在している。

⁶ 見方を変えると、格付与のための構造的な条件はかなりの程度満たされていることになる。

⁷ 主語が「に」で表示される事例の分析や関係詞節の獲得との関係についてはSawada, Murasugi, and Fuji (2010) を参照のこと。

参考文献

- 有村兼彬・他 (2009) 『英語学へのファーストステップ (改訂版)』英宝社, 東京。
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Crain, Stephen and Rosalind Thornton (2000) *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- de Villiers Jill (1995) Empty categories and complex sentences, In *The Handbook of Child Language*, Edited by Paul Fletcher and Brian MacWhinney, Oxford: Blackwell.
- de Villiers Jill, Thomas Roeper, and Anne Vainikka. 1990. The acquisition of long-distance rules. In *Language Processing and language Acquisition*, Edited by Lynn Frazier and Jill de Villiers, 257-297. Dordrecht: Kluwer.
- 古川武史・福田稔 (2009) 「空移動仮説について」『宮崎公立大学人文学部紀要』第16巻, 265-279.
- George, Leland. (1980) *Analogical Generalization in Natural Language Syntax*, Doctoral dissertation, Cambridge, MA: MIT.
- Guasti, Maria Teresa (2000) An excursion into interrogatives in early English and Italian. In *The Acquisition of Syntax: Studies in Comparative Developmental Linguistics*, Edited by Marc Ariel Friedemann and Luigi Rizzi. Harlow: Longman.
- Guasti, Maria Teresa (2002) *Language Acquisition: The Growth of Grammar*, Cambridge, MA: MIT Press.
- MacWhinney, Brian (2000) *The Childe Project: Tools for Analyzing Talk*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associate.
- Maxfield, Thomas (1990) Children answer echo questions *how?* In *UMOP Special Edition: Papers in the Acquisition of WH*, Edited by Thomas Maxfield and Bernadette Plunkett, Amherst: GLSA.
- Murasugi, Keiko (2010) The linguistic constellations: Relating acquisition phenomena with

- parameter setting, A handout presented at GLOW in Beijing, August 14, 2010.
- O'Grady, William (1997) *Syntactic Development*, Chicago: University of Chicago Press.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Development and the Acquisition of English Syntax*, Oxford: Blackwell.
- Saito, Mamoru (2004) Genitive subjects in Japanese: Implications for the theory of null objects. In *Non-Nominative Subjects*, Edited by P. Bhaskararao and K. V. Subbarao John Benjamins, Amsterdam, 103-118.
- Sawada, Naoko, Keiko Murasugi, and Chisato Fuji (2010) Theoretical account for the 'erroneous' genitive subjects in child Japanese and the specification of tense, *A Supplement to the Proceedings of the 34th Boston University Conference on Language Development*, Edited by Jane Chandlee, Katie Franich, Kate Iserman, and Lauren Keil, April 2010 (<http://www.bu.edu/linguistics/BUCLD/supp34.html>) .
- Schutze, Carson and Kenneth Wexler (1996) Subject case licensing and English root infinitives. *Proceedings of the 20th Boston University Conference on Language Development*, 670-681. (www.linguistics.ucla.edu/people/cschutze/BU20.pdf)
- Stromswold, Karin (1995) The acquisition of subject and object *wh*-questions. *Language Acquisition* 4: 5-48.
- 鈴木 猛 (2007) 「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」『東京学芸大学紀要・人文社会科学系 I』58, pp. 45-59, 東京学芸大学. (<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/65548>)
- Takahashi, Mari (1990) The acquisition of echo-questions, In *UMOP Special Edition: Papers in the Acquisition of WH*, Edited by Thomas Maxfield and Bernadette Plunkett, Amherst: GLSA